

文学は語りを横領する

— 森鷗外と中野重治（シルバーバーグ『チェンジングソング』と
トリン T. ミンハの著作を受けて） —

西 成 彦

西です。僕はすばらしいコンサートや芝居や映画を見た後は、その場で泣き崩れたり、喜怒哀楽をあらわにするのは恥ずかしいので、とにかく家まで直行したい、そう思うことが何度もありました。ですから今日の話も聞いていて、早く家に帰って、自分の仕事をしたいなと思っています。こういう所でさらし者になって、ある意味では動物園の動物のような状態になっていますが、そちらの仕事が片づけないと、帰らせてもらえないという非常に窮屈なところで、ともあれ時間を有効に使いたいと思います。

今日は、各自がそれなりによく考えて、何かしゃべれということなのだと思いますが、自分がしゃべる前にお三方から問題提起をされてしまいますと、どうやって考えてきたこととはめこむのか、ほとんどジクソーパズルみたいな窮屈さをその上に感じさせられてしまっていて、非常に困っています。とにかく資料を用意してきましたので、それに沿ってお話していくしかないと思います。

今までの話の流れで、私自身に要求されているのは、鄭暎恵さんの問い掛けに対して、日本の男の、しかも知識人である自分に何が出来るのか、これからお前は死ぬまでの数十年の間に何が出来るのかというプログラムを、一部だけでも開陳する以外ないだろうと、今日は開き直るつもりです。

今日の岡さんと姜さんの話は、政治ということに関して、お二方共非常にこだわった議論を展開されたと思いますが、ある意味で非常に対照的であったと思います。簡単にいえば、岡さんの場合は、マイナーな政治、暴力の問題であったと思いますし、姜さんの場合は、大きな世界政治のほうに傾いた話であったと思います。もう一つ、岡さんの話では、いわゆる歴史というよりは語ること、語りが問題であ

ったと思いますし、姜さんの場合では、大きな意味での歴史というものをどう総括していくのか、未来に向けてどう放っていくのかという話であったと思います。自分のこれからの発表は、その中間に位置するように思います。まず自分のポジショニングはそういうものだとは自分では理解しています。

この題そのものが11月のシンポジウムのいろいろな方々の言葉をパッチワークしたようなものでして、特に私が担当した初日はミリアム・シルバーバーグさんに、ご講演いただきました。その時、彼女の発表テーマは中野重治ではなかったのですが、来日したその時に『チェンジングソング』の翻訳が出て、日本語であらためて熟読しました。又、同時に今日も同僚の中川（成美）さんのゼミの人たちがたくさん来ているのですが、立命館に就任するやいなや、こういう立派な本をいただきました。中川さんのゼミでは、林淑美さんが編まれた平凡社ライブラリーの『中野重治評論集』をじっくり読まれながら、学部生とは思えないくらいしっかりした論文を毎年たくさん雑誌に載せておられます。たぶん来年の春には又雑誌の3号がもらえるのではないかと期待しているのですが、そういうさまざまな流れの中で、中野重治については、僕は非常に長い間、肩書というカレッテルごしにしか読んでこなかった。そんな自分にとって、シルバーバーグさんや中川さんのゼミの学生さんたちとの出会いは、目を開かせてくれたところがあります。

シルバーバーグさんの『チェンジングソング』という本は、中野重治を非常にあざやかに、生き返らせてくれたというか、われわれにとって決して古い人ではないのだということを教えてくれた気がしています。そういうことがありまして、中野重治を機会があれば、パラパラ読んでいるのですが、膨大な

著作のある人なので、全部読むことはできないのです。が、このレジメに書きましたように、僕自身のものを考える時の出発点はずねに羨望であるというように、最近開き直っております、あるものにひかれるというのは、逆にその人を羨ましい、羨ましいから叩きつぶしてやりたいと思うぐらい、羨ましいと思ってしまうことすらある。そういうことだと思のです。そういう破壊的な衝動をどうやって転化していくのか。そういう中で当然それに対する不満みたいなものも感じざるをえない。しかもその不満はもうその時は自分に突きつけられているわけですから、不満に思ったことは、自分が引き受けなきゃいけない。そういうように考えて、日々読書をしています。

それと平行して、私は語りの問題、特に女性の語りの問題について、ここ数年間考えてきました。その中で、いつでも頭の中に残っていたのは、森鷗外の『山椒大夫』という作品であります。この作品は一見、古典を下敷きにした、文学であるかのように見られていますが、非常に複雑な成立のバックグラウンドが存在しています。ここには鷗外研究者の方もいらっしゃると思うので、そういう方にはいわずもがなかもしれないのですが、これは森鷗外が子供の頃に津和野のおばあさんから聞いた話をいつか作品にしたいと思っていたが、それがなかなかかわず、弟が死に、明治も終わりという大正時代になって、はじめて作品化したと言われている作品です。この『山椒大夫』に関しては、一般的に説経節といわれる中世後期から近世にかけて、旅芸人たちが、自分たちを『山椒大夫』の安寿と厨子王や母や乳母の4人組に重ねようとする人々が、自分たち自身を語るのではなくて、そういうある一つのフィクショナルな離散家族を演技しながら、同時に見る人の中に彼らの姿と彼らが演じている物語の離散家族をだぶらせるような形で、成立した語りであったわけです。ところがそれを森鷗外はおばあさんの口を通して聞くわけですね。その時に林太郎君が何を聞いたかということ、それは説経の語りを聞いたわけではない。むしろおばあさんは彼をあやそうとしたのか、とにかく彼の物語を聞きたいという好奇心に応える形で語った。つまりどこかで説経を耳にしたのか、

あるいは説経を聞いた人から又聞きしたのかもわかりません。そのおばあさんが子供の頃に誰かから聞いたのかもしれない。そういうもの同士、あるいはスキンシップを通して深くつながっている老人と子供の間の親密な語りとして“安寿恋しやホーヤレホー”というような歌をまじえながら、たぶん彼女は彼に語ったわけです。

その当時、日本の交通や商品流通のネットワークというものはまだまだ形成段階にあり、しかも前近代的なネットワークの中で自己更新をつづけていた中で、ネットワークの中を移動する旅芸人たちがネットワークを作りかえて、つまりネットワークを消費しながら同時に、ネットワークを構築していくような、それこそ旅行ガイドにもあたるようなさまざまな地名を折り込みながら語る。東北から北陸を抜けて、京へ抜ける街道筋を旅行も出来ない人々に思い浮かびあがらせるような非常に啓蒙的でもあり、又逆にネットワークビルディングというのでしょうか、まだネイションビルディングとはいえないと思いますが、そういう生産力を持った語りとして芸人たちが語っていたものを、おばあさんは非常にアットホームな近親者の感情を高める道具として、搾取、というか利用したわけです。それを森鷗外は暖かみというものを籠めて、明治を通してずっと記憶していたわけです。しかし彼にとって、明治が終わった大正になって、新たに作品にするにあたって祖母から聞いた話そのものを再現するということは、ほぼ不可能であったわけですし、彼はさまざまな江戸時代の文学にも非常に親しんでいたわけで、『さんせう太夫』の正本を各種手に入れて、それをもとに書くわけです。

ところが『山椒大夫』はほとんどの方がご存じだろうと思いますが、それはあくまでも近代的なテキストとして、シルバーパークさんの用語を使えば完全に替え歌というのでしょうか、組み換えられてしまっています。しかもそれについて森鷗外は「歴史離れ」というエッセイの中で、その種をあかしています。つまり自分は聞いたものを再現するとか、自分が下敷きにした江戸時代のテキストを再現するなんてことは毛頭考えていなくて、むしろそういうこととは違う、近代的なテキストをつくらうとした。

例えばオリジナルなテキストにおいては、厨子王が国主になった後に、山椒大夫を処刑しに出掛けていくわけですが、森鷗外はそこをあっさりと山椒大夫の所に出掛けて行って、奴隷を解放させる。そのことによってかえって『山椒大夫』は発展したのである。ある意味では非常に近代的な歴史観というものを盛りこんで、改竄していった。ですからそういうような3つの水準の語りというようなものが、『山椒大夫』を取り上げた場合に、問題になってくると思います。

つまり文学に先行するさまざまな形のそれ以前の語り、それこそ人の世界観を広め、又それを歪め、それを私的な目的のために流用するような豊かな言語活動というものが、極端な言い方をすれば、なかなか表に出てこない。大きな意味での歴史を動かすような力になってこない。そういう前近代的な社会の遺産というようなものを森鷗外はある意味で特権的な知識人の立場から流用することによって、逆に近代性を前近代の装いのもとに描いてしまった面があると思って、それを今、考えているところなのです。

そういうようなことを考えながら、中野重治を読むことを平行してやっております。中野重治の『鷗外論』は有名ですが、そういう視点の中で改めて、前回のシンポジウムを踏まえながら、1952年に集められた『鷗外—その側面』を読み返してみました。僕はただ無知だっただけなのですが、中野重治は転向して、大戦中に茂吉や啄木についてもたくさん書き残しておりますが、鷗外についても6編ぐらい書いています。例えばその『側面』の中に入っている一番古いテキスト、『都新聞』（1940年）で、“鷗外あたりが高貴な文学だという俗説はこの際見直しておくほうが、将来のためだろうと思う。”この将来というのはかなり戦後まで見据えた将来ということを書いてあるのだと思うのです。日中戦争のまっさなかでありますから。そういうようなことを書いて、どういうところに彼は注目しているのかということ考えた時に、もう一つ具体的なテキストとして、これは1945年2月でありますから、東京大空襲の直前に活字になっているものなのですが、『独逸日記』について」があります。これは相当長

いテキストなので、全部紹介することはできないのですが、ハンドアウトの右下にプリントしておきました。鷗外の『独逸日記』というのは、『妄想』や『なかじきり』や『舞姫』や『文づかひ』などを理解する時の、研究する時の補助資料として使われることが多かったというように書いてあるのですが、しかしそうではなくてもっともっといろんなことが書き込まれているではないか。

例えば、“宴会に出るごと、酒屋、飯屋、茶店に入るごとに出てきた女、娘、婢について必ず記録されていることなどに注意を向けさせるものがないのは、(…・) 不満足である”といったあたりです。森鷗外はベルリン時代とにかくどこに行っても女の尻ばかり追いかけてまわっていたらしい。飲んだりはもちろん、飲む所に行くと、必ず女がいるということで、それで飲み食いが好きになっているというぐらい、若いから当然だといえばそうなのですが、そういう存在であったということを『舞姫』を論じる時にすら、誰も考えていないではないか。森鷗外を神格化するがあまりに、禁欲的で我慢して我慢して、とうとう最後彼女を見つけたけれども、それでも我慢してとうとう我慢しきれなくなって、セックスしたら子供が出来てしまった。しかし彼女と結婚することが出来ずに、置いて帰ってきてしまった。その我慢して我慢してというところばかりが強調されてきてしまっている。僕は中学生ぐらいで『舞姫』を読まれた時に、なんでこいつはこんなに我慢しているのだろうと思いながら、自分も我慢していたので、こんなものかと思っていたのですが…。

『舞姫』は、まずきちんと性欲を描いた物語だというように読めないのかということも改めて思ったわけです。実際『独逸日記』の中には、女性に関する記述が非常にたくさん書き込まれています。それも自分自身についてはあまり語っていないのですが、周囲の日本人がいろんな形で現地妻を持っているとか、娼婦通いをしているとか、あるいは自分の便宜をはかってもらうために人に女を斡旋したとかの話がいっぱい載っている。又、かつての蘭学医であった林研海という人も、そういう問題で苦しんだとか、エピソードがいっぱい載っているわけです。

ところがそういうところは研究されてこなかったし、しかも中野重治が戦争末期にこういうことをいっていて、又この本は非常に定評のある鷗外論の一つであるにもかかわらず、その後50数年間この問題に誰も踏み込まないまま来てしまっているんです。

これはやはり森鷗外について、石川淳がいていたことだし、中野重治も指摘しているのですが、つまり彼を衛生学者であった、あるいは軍人であったということを抜きにして、作家として読もうというような姿勢を研究者はつい取ってしまう。衛生学者としての例えば性欲に対する関心であるとか、売春制度に対する関心であるとか、そういうものはまったく頭から抜け落ちてしまって、非常にロマンチック・ラブの話としてしか『舞姫』が読まれてこなかった。又、日本人はそういうようにしてしか読んでこなかった。その上にさらにいえば、例えばあの「太田豊太郎の手記」は、サイゴンの港で書かれているのですが、彼はたまたまというか、心にメランコリーを抱えていたがゆえに部屋の中にもって、あれを書いたということになっている。それこそ自己表象したということになっているのです。じゃあ、他の連中は何をしていたかという、みんなで陸にあがって、おいしいものを食って、おいしい酒を飲んで、女性の尻を追い回していたわけです。つまりたまたま彼はそういう仲間理由があって、加わらなかったのも、もしそうでなければ、何をしていたかわからない。森鷗外は自分自身のことは書かなくても、周囲のことなら書いたかもしれない。これもポスト・コロニアルな読み方ではないかと考えております。

そしてそういう流れで、男性側の性欲というようなものが見境なく、さまざまな女性に向かって襲いかかっていってしまい、そしてそれを文学というものが搾取していってしまう構造を森鷗外はかなり意識的に自分の作品の中で再現しているのではないかと、最近では考えております。

これも森鷗外の作品の中でなかなかおもしろいものであるにもかかわらず、内容があまりに過激であって、日本のナショナル・ヒストリーの中でのもっとも汚点である部分に触れてしまっているがゆえ

に、ほとんど省みられてこなかったといってもいいようなテキストとして、もうひとつ『鼠坂』をプリントの裏に載せておきました。これは昨年出た黒川創さんの『国境』（メタログ）という本の中で、かなり本格的に取り上げられています。時間がありませんので、読みあげることはとてもできません。プリントが悪くて申し訳ないのですが、基本的に話は簡単です。つまり日露戦争の際に、従軍記者として行っていた日本人記者が、ほとんど無人島化した満州のある村落に寝泊まりして、夜、厠に行ったら、厠に一人の少女が隠れていた。その彼女は非常に別嬪であったので、襲いかかって強姦した。しかもその彼女に顔を見られたがゆえに、その後、首をしめて殺してしまったという話を、彼は友人の日本人男性に語った。それを聞いたもう一人の日本人男性は、満州で大儲けして東京の鼠坂で新築祝いをした際に、その当事者である記者と、もう一人の友人を呼んできて、その友人、第三者に向かって、そいつの旧悪をばらすという設定なのです。しかもそのばらしている席に奥さんがいて、それを平然と聞き流して三人にお酌をしまわるといって、日本のサバルタン女性がどういうものであったかがよくわかると思うのですが、つまりそういう話です。しかも最後にそのばらされた男は、その後、顔色が悪くなって朝起きてみたら死んでいて、それが新聞記事になったという話でありまして、それはフィクションなのか、本当にあった話なのか、確かめておりませんが、例えばそういう種類の問題に森鷗外が作家として、片方で関わっていた。と同時に、衛生学者として、なんども戦地に赴く彼が戦地における、いくら結婚してはいても単身者として行くしかない戦場において、性欲コントロールについて衛生学者としてのポジション、立場をどう貫いていくべきなのかという非常に途方もない問題に、正面から向き合っていたと理解すべきだと僕は思っています。

だからといって、森鷗外がえらいとかいうのではなくて、つまりそういう仕組みが問題であるということ、明らかにこの物語は語っているわけです。かつてこの新聞記者は自ら蟹蟹をかうかもしれないことを得意気に語ってしまった。しかもそれを今度は他者に語られてしまうことに、非常に傷ついて死

んでしまう。又、そういう時にそれを聞いているのか、聞いていないのか、女性が平然とにこにこと笑ってお酌をしまわっているという、非常に不気味な世界であるわけです。

しかしこの世界をわれわれはそれこそ姜さんがおっしゃったような、今の中間的な大衆はどれだけ居心地悪く感じられるのかどうかを考えていきますと、そこで即答することは非常にむずかしい、単純な解答はむずかしいと思うわけです。

つまり文学というものは、さまざまな時代背景の中で、さまざまなナラティブというようなものが交錯しあって、対話的にある時は人を傷つけ、ある時は人をあおり、ある時は人を死にまでいたらしめ、逆に自分で自己表象をすることによって、そこから生き延びてしまうとか、さまざまな功利的な目的のために利用されてきたナラティブを、もう一度再組織化するような一つの装置というか工場のようなものとして、機能しているように思うのです。

そのように機能しているはずの文学を、やはり自分も含めて文学研究者はそういう装置としては全然理解してこなかったことに対する猛烈な反省を、まず僕は日本文学研究者として、鄭さんがいらっしゃらない時に、いくらレスポンスしてもしょうがないのかもしれないかもしれませんが、自分自身に強いいたいと思っている。まずそういう内側にあるマイノリティというのですか、サバルタンというのか、あるいはディアスポラという居心地の悪さをあらわす定義を自分なりに肉づけしていきたい。そう思うのです。例えば11月のお話で、僕が申し上げたことは非常に単純なことで、仮に自分がそうであるような日本人が、それでも自分はクレオールであるとか、あるいはディアスポラであるとか、それは姜さんがおっしゃる分にははまっちゃうのですが、僕はディアスポラだというと、どこがディアスポラなんだという問いにもっと具体的に答えなきゃいけないし、答える方便

に多分姜さんの百倍ぐらい労力が必要になってしまいます。しかし、だからこそ、僭越ながらもクレオールだといってみる。あるいはディアスポラだといってみるものの重さというものをまず引き受けるところから始めようという話をしたつもりでいるのです。

それはどういうことかという、今日の話はその具体例として申しあげました。つまり森鷗外は同じ日本の先輩、知識人であり、又、中野重治も同じく先輩、知識人であると考えた時に、彼らは僕とまったくイコールで結ばれるような同一性を決して持っていない。つまり中野重治は森鷗外を救い出そうとしながら、救い出せないまま放棄してしまっていて、それを僕が引き受けていかなければいけないというようなバケツリレーが必要なのです。これからももっともつとろんな人たちのバケツを引受けながら、日本の中にある単一性という幻想を切り裂いていくようなことをやっていかなきゃいけないと思うのです。同一性の原理を引き受けないことというのは、その要請に対して相手の期待通りには応答しないということなのですが、それでも敢えて応答するときには、突きつけられた暴力に対して、その突きつけられたものに対して自分に欠けているものを補い、又、それに過剰であるものに嫉妬し、そういう形で自分の位置を新しく作っていくことなわけです。

結局僕は、すごいオブティミストなのですが、それしかないというように思っています。ですから岡さんのようなアラビア語も出来る、しかも女性にはすごく羨望を感じますし、姜さんにも同じく羨望を感じるわけでありまして、そういう羨望を武器にしてやっていくしかないというようなことで、今日の話の中に無理やり介入したことにさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)